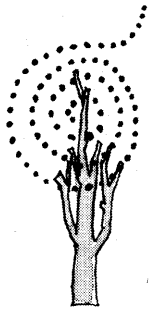
# 七夕祭

黒板伸夫



七月七日の「たなばた」は、牽牛、織女の二星をまつる行事です。現在の暦では夏の盛りに近いころですが、もともと旧暦によったもので、秋の立ちはじめる時期でした。

牽牛星は彦星ともよばれ「わし座」の星、織女星は「琴座」の星で、天の川をはさんで輝いています。

古代の人々は、日、月や星の運行と、人生の間に深いつながりを信じており、また多くの神話や伝説がつくられていることは皆さんもご承知のことと思います。

古い中国の伝説では、織女は天帝のむすめで、天の川の東に住み、機織り（はたおり）に精を出していましたが、天帝は彼女のひとり暮しをあわれんで、天の川の西に住む牽牛のところに嫁入りさせました。ところが結婚すると織女はすっかり機織りの仕事をやめてしまったので、怒った天帝は彼女をもとの場所に帰らせ、一年に一度しか牽牛に会うのをゆるさないことにしました。七月七日がその二星が会うのを許された日で、この時、鵲（かささぎ）が天の川の上につばさをひろげ、かけ橋の役をしてやるという伝説もあります。

前に述べたように、星の運行は人の世の事に密接に関わっていると信じられていましたから、結婚などの重要な事柄には、とくに星の位置が気にされていました。したがって、このような星の結婚の物語がつくられるのも自然のことだったと思われます。

一年に一度だけの男女星の会合という物語は、感じやすい古代人のロマンティックな夢を、どんなにかきたてたことでしょう。地上の数々の恋人たち、ことにたやすく望みのとげられぬ恋人たちは、自分たちの悲しみや喜びを、この二星のおもいに託したことと思います。そして、恋のとげられるように二星に祈ったのです。しかし人々が祈ったのは、恋のことだけではな

く、織女に機織りの上達を願い、さらにいろいろな技芸の上達を願うのでした。むしろそのことが「たなばた祭り」の中心的な行事になりました。

わが国でこの日を古くは「なぬかの夜」とよびましたが、のちに「たなばた」というようになったのは、織女を「棚機つ女（たなばたつめ）」とよんだことから来ています。そして「七夕」という字に「たなばた」というよみを当てるようになったのです。

この祭のもとは中国ですが、早くから日本に入り、日本的な季節感や風土とよく融合して行きました。

日本でも奈良時代より前に、すでに七月七日が朝廷の節会（せちえ）として行事が行なわれていました。そして、この日に相撲（すまい）が行なわれたり、虫干しをしたりしたようです。そして、その中でしだいに重要なものとなって行ったのが、織女に技芸の上達を祈る「乞巧奠（きこうでん）」なのです。中国で行なわれたように五色の糸をさおの先につけて立て、瓜など、いろいろ供えものをして星をまつり、その時に女の人は月に向かって針に糸を通すことを試みたり、あるいは供えものの瓜に蜘蛛（くも）が巣をかけるかどうかによって上達の願いがかなうかどうかうらなうなどの風習も日本に伝わっています。蜘蛛（くも）の糸のうらないには、小さな蜘蛛をふた物に入れ、翌朝その中につくられた巣の出来具合をみるというのもあったようで、これらのならわしは、「織女（たなばた）はそらに知るらんささがに（くものこと）の糸かくばかり祭る心を」という和歌によっても察せられます。

日本ではまた古くからこの日に朝廷で文人を召し、七夕の詩をつくらせることが行なわれましたが、このような時につくられた詩をはじめ、七夕のことを詠じた詩や和歌が多くあります。

平安時代、朝廷でのこの祭りの供え物のしつらえをみますと、清涼殿の東庭に長むしろを敷き、その上に朱塗りの高机を四脚置き、まわりに黒塗りの灯台を九本立て火をともします。北側の机二つには、瓜をはじめ果物、豆、干魚などを置き、南側の机二つには、針、糸、香炉、鏡など、それに中央に両方の机にさしわたして琴を置きます。

そして二星の会合をながめ、時には詩の会、音楽などが行なわれました。上達を願うことは、機織りや、裁縫だけでなく、音楽や、書道、文学などにわたっているのです。織女星は、ギリシャ神話のミューズの役割をしているわけです。

さて二星の会合をみるということは、平安時代に盛んに行なわれました。星合（ほしあい）ともいい、物語などにも出て来

ます。人々はこの夜の空が晴れることを望んだことでしょう。ここに一つ、興味ある出来事をご紹介しましょう。

長和四年（一〇一五年）の七夕の翌日、若い公達（きんだち）の左衛門督藤原教通（さえもんのかみ、ふじわらののりみち）は父の道長にこう話しました。

「ゆうべ私は二星の会合をたしかに見ました。どんなありさまだったかと申しますと、二星が両方からだんだんに近よって、その間が三丈ばかりになりますと、小さな星が両方から出て来て大星のところに行き、それが帰ったのち、二星は飛ぶように近づいて会合しましたが、その後、雲におおわれてしまったのです。」

父の道長はいうまでもなく、あの栄華をきわめ、望月（もちづき）のかけたることもなし……と歌った人物ですが、この話は彼の日記、『御堂関白記』に書かれています。彼は、「昔の人がこれを見たということは伝わっているが、近来は全く聞いたことはない。感銘深いことだ。」とのちに書いています。

牽牛星も織女星も恒星で、実際に近寄ることなど全くないわけです。この話は、教通の幻想なのか、幻覚なのか、あるいはたまたまこの方角に流星でもあったのか、なぞというほかはありません。

ともかく、朝廷をはじめ、平安時代の貴族の七夕の祭はほぼこのようなものであったわけですが、平家物語には、梶の葉に思うことを書いて願うことなどがみえています。

さて、この日には古くから節供（せっく）として、索餅（さくべい）が用いられました。朝廷では内膳司が調進して天皇の朝餉（あさがれい）にたてまつりましたが、索餅というのは「むぎなわ」ともいい、小麦と米の粉をねり、細長くねじった菓子ということで、中国の伝説に、高辛氏（こうしんし、神話の中の帝王）の子がおさなくして死んで一本足の悪鬼となり、人々を瘧病（おこりのやまい）にするので、この子が生前に好んだ麦の餅を供え、それを人々も食べて病を除けたということによるといいます。後の時代では、索麺（そうめん）を食べるようになりました。

時代が下り、また民間ではそれぞれおもむきをかえて行き、たとえば供え物や、その時作る和歌の数などに、「七」の数を用いたりするなど、いかにも形式的なことも重んぜられるようになりましたが、平安時代に形造られた王朝的な優雅なおもかげは伝えられ、いまも行なわれる竹に文字や和歌などを書いた短冊をつける風習などにしても、私たちを昔の夢にさそいます。

ここでちょっと考えなければならないのは、七夕は牽牛、織

女の二星会合を祭ることから出発していながら、どうも織女が中心となり、牽牛、すなわち彦星氏の方は影がうすいことです。古くから牽牛も農作の神として考えられ、全く無視されてはいなかったようですが、どうもあまりぱっとしません。

ところが江戸時代の書物に、地方によっては七夕の前日の六日の夜、人々が野辺に出て火をもやし、遊びたわむれたりする風習があり、これは牽牛星を祭り耕牛の無事を祈るのだと記しています。

六日の夜から行事を行なうことも、かなり古くから例がみられますが、その日に牽牛の祭りをするというのは、いかにも農村らしい風景だと思います。

このほか地方にはそれぞれ特色のある風習のあったことが、近世の書物に記され、たとえば房総地方には、わらで牛馬の形を造って戸上にかけ、牛郎、紅女を迎えるのだとしたり、信州松本では、縄を路をよこぎって軒ごとにかけ、紙衣をきせた人形を幾つとなくつるというなどもおもしろいと思います。今でも地方色のある七夕祭は多く残っていることでしょう。

現代では、たとえば仙台や平塚などの七夕祭りが全国的に有名です。これはたいへんに豪華なもので、あらゆる趣をこらした飾りものを商店街にすきもなくつりさげたさまは、何とも見事です。しかしこのような形で行なわれることには、あまりに商業主義と結びついていて、七夕祭り本来の、素朴で優雅な古代人の祈りからはあまりに遠いものに感じられます。多かれ少なかれ都会における七夕祭りには、このような姿が、他の節句などでも同様ですが、どうしてもみられるようです。

昭和七年に刊行された古い平凡社の百科辞典の「七夕」の項に面白い記載があります。

「……明治に至って地方民俗に於ける七夕行事はとにかく東京に於ける七夕は頗る衰微し、そのまま大正、昭和に至ると好事の者の他全く七夕行事を顧るものなきに至った。これを遺憾として東京市当局の間に復興の議が唱へられ、昭和二年より日本風俗研究会指導の下に七夕祭を市の年中行事として行ふに決し、市民祭として毎歳行はるるに至った。」

このように東京のような大都会では、近代になって古い行事の伝統がたち切られ、あらためて市民祭というような形で復興されているので、この辺に強く商業主義と結びついて来る素地があるのではないでしょうか。そして都会では夜も明るく照らされ、加えてスモッグで、天の川など見ることができなくなりました。加えて商業主義むき出しの七夕祭りではあまりにもわびしい現代ではないでしょうか。

（吉川弘文館）